



文選

卷之四

四

明 治 二 年 官 許

加藤弘藏著

交易問答

全二冊

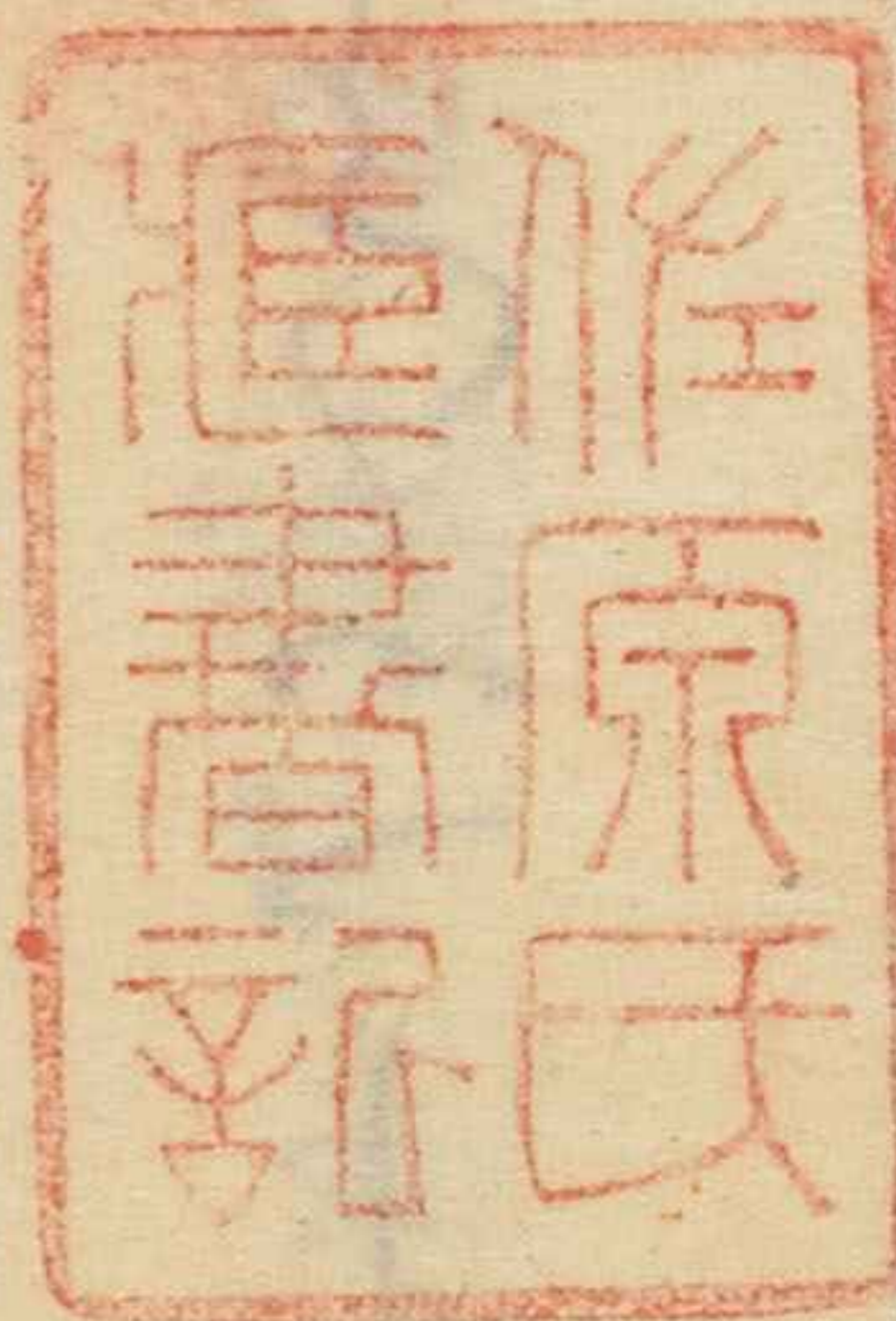
東京谷山樓藏



128906

小序

先年一未燥忱の士類を唱ふの
餘勅もすむを込激れ奉勅を以て國
家の類を以てせし者方かゝる言に類
様の論を夏もより出つ其志は嘉に下
らざる甚か時勢より近し潤あり者ふしさい



井蛙の倂見多るを先きす。是故に今
夜

相取一新の村は舊りても故し其位を

採り玉を以て更し。各國と條約を結ひ

多市場を恒加。また。貿易日を廣く

せん。玉不鳴呼。其ありしつら。

たれも仍舊税を株守——頑論を主張
すも若少のみに加へ市井の細民も
高鎖攘を是とて通商を非とすも若
十の七八は中へは其否——きに及んで
洋字を見ても習字を強う目を怒じ
て相ふも若少地所さらば——是ら

一 友廣其志をきりて 玉ふらんとす
 家曉江海人こ心紹よむとす 其契
 遂に除く之のまに 交頌禱辭見の國家
 其阿のそ因より 報を候すて 明な
 其の細文の表紙 越より 事 理を篇にす
 其口誦其の喩の如く 命天中の事 其集

あしとふあかす方々 皇学大に改興
— 士人の此世を志しむ者にとに事をかかれも
新徳大和魂のかゝる固陋は細かきものなり
非なるを知らずして自ら開闢の可き習俗を
この初めすくを信じて舊來の徳に自ら増
進せんことを豫め切に—と徳を唯知て憂

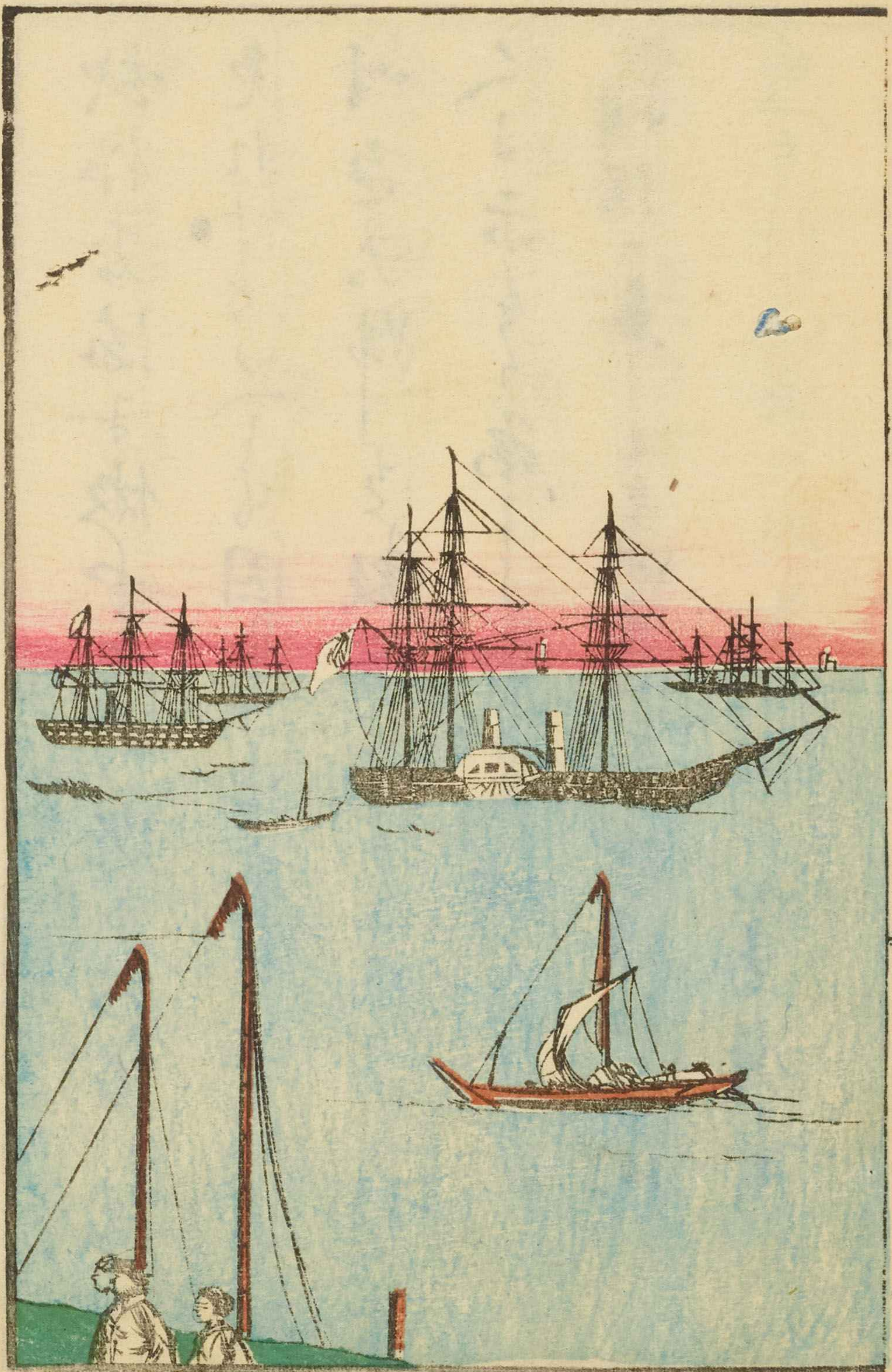
之きは細式の御見のみ細氏固より
 皇
 子——位するの日なれば終く開鎖の海失
 きつ細——細編をく棄るの時おろしん余之を
 奪ひ細式を——て和用類の利言書を焼く
 ———知んをく初すその老母の心より——之後此一小
 冊を著——以て世に公しせんを以て唯其文

此作者流子倣ふものの
遊方方々を
免れしむるに因りて
此書を著すに
時を夫婦を教諭す
るに可なり
人々亦多し
為りて
あき
て
破
を
打
り

明治二年己巳四月

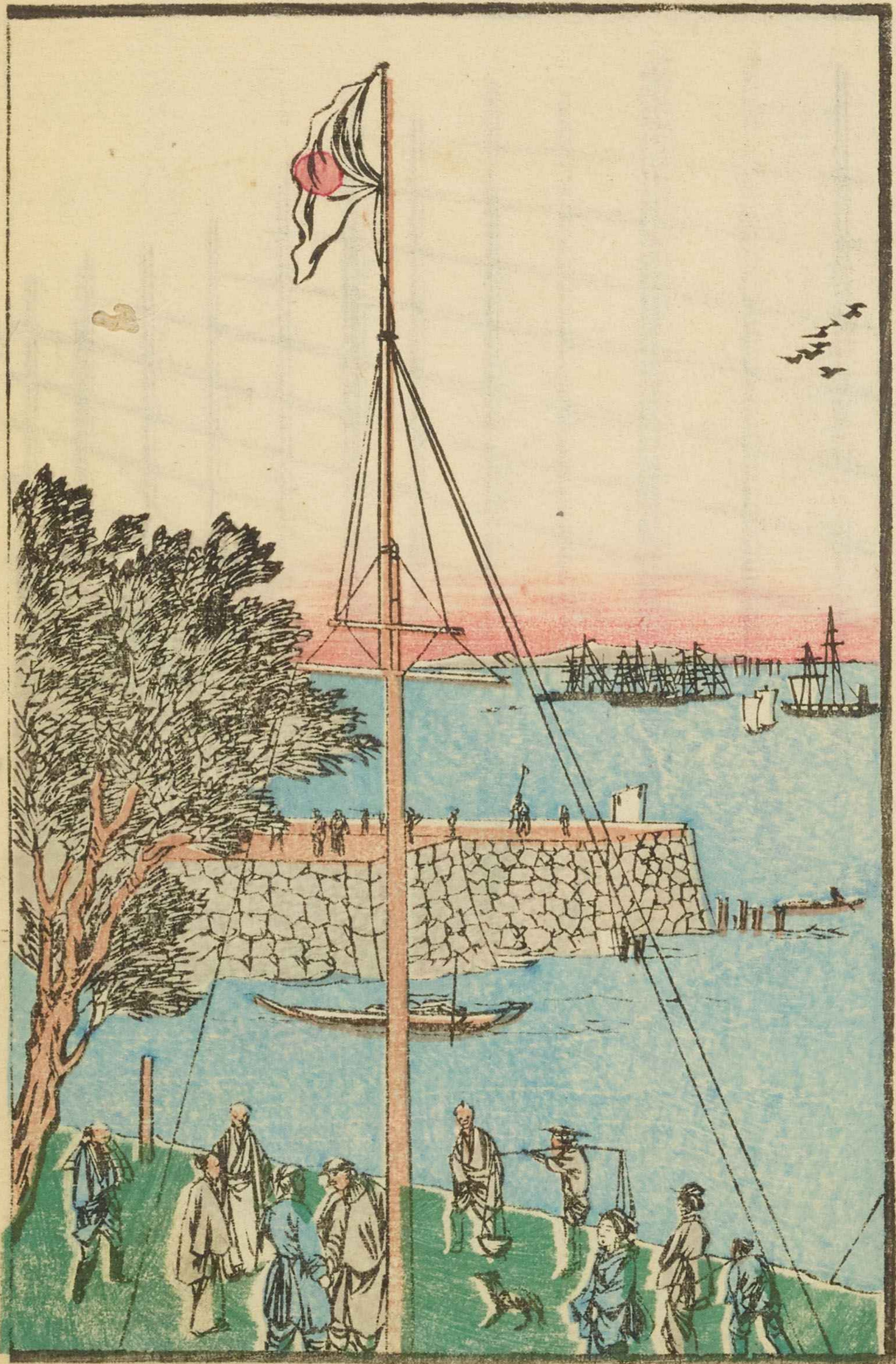
加藤知蔵徳

小島廣書



五

五



り
り
え
き
り
ん
ご
ん
り
ん
ご
ん



五

五

五

五

交易問答卷之上

加藤弘藏著

頌六

ナント才助君。僕ハ一向合点の参り申
さぬと。かござる。今度此公儀と申以者
が。るくるつて。天下の政事ハ
天子様で。るさる。根なるつ。う。是迄
此公儀。と。可愛かり。あさつ。醜夷等ハ

といふは、神國にてこゝろのりらに本

人の知恵とらふ者ハ申く醜夷等の
及びもあいにとど。物事何も角も十
ま備つて。何事不足のあいにしよ。屯
界随一の玉ごそりてござる。そこで怨
の深い醜夷等ハ己が玉り悪國で物
も何も角も不足ごらけごあごり。世
界の國々なら。唯事々の目奉玉。茂
日。裁て来て。彼奴等が國の何の益よ

も立ふい品物と持越して日本の
 結構な品と買出がひく日本の
 諸品と買取して日本人と弱らせ。
 結局は日本の西國進も彼奴等が
 物と志やうとりふ不届子ある企と
 するのてござる。夫故近年諸色は
 おひく拂度よりつて。壺候ハ日々の
 格より上り。何れも三増倍や四増倍

よららるるい物のあいらりふハ思入を
 後バ何さる世の中うらでござるり是と
 いふもみんあ醜夷等けしうとんどもが仕業しごでござる。
 是これ程ほど悉しつい醜夷等と何なんぞ
 天子様てんしさまハ大事だいじよあさつて。彼奴等かやつらがい
 小通ことりよあさるでござる中なら。僕等ぼくらの
 根ねあ三錢さんぜんよもあらるい老耄らうぼう翁おきなも。
 實じつよ切齒せつしやうでござる。ナント才助君さいすけきみ。

卷二

三

そつりでいござらんろ。

才助

頑六君足下ひどく交易のしつとこる

くいひるさるが。僕もハ足下の理窟

ハ一向かりません。僕も或先生の直話

と毎度聞まうさ。交易とらふりのハ。

あつてゐるいりのごそつりでござる。

なせとりふよ其證據もハ先ツけむ界

の... 田... 治... 寸... 農... 七... 道...

る世といふは其の強弱より出づるに非ざる

の閑け始まり時分りて農業此道ハ
勿論衣服を製へることもあらず。況
て家を建るといふこともなからずが。
其後神様のおうげぞ。おひく
農業の道もひらけ又とろろわうり
衣服をあらうらうること知り。衣
を建ることふとも閑けこのぶそら
ぐとらざる。併其をもじめ各人お農

業ごうも志しくり。衣服いふくも製つくへ多おほり。家いへも建たて
 るとりふやうあことと由よし。あらうく
 手て廻まりかねく。加かえ何も角かくもよいこ
 とと出で来きるんどこと見みえる。其その出で
 ぐますますますまの知ち恵えが出て。各おの人ひとも何なん
 も角かくもすはのをや免まく。壁かべへむをむ人ひと
 を農のう業ごうをして。稲いね麦むぎをつり。又また人ひとを
 家いへをた建たてるのをた家いへ業ごうとし。今いままま人ひとを衣い

及およびのをた家いへ業ごうとし。今いままま人ひとを衣い

家を建てるのを家業として今も人々を衣

服ものを製つくへるのを家業かごうふすはと
格かふ。其その外ほかすべし。のの家業かごうを
分わけて。各それぞれ人ひと其その家業かごうむらりに精せい出だし
て。譬たとへば。農のう業ぎょうをして。稻いね麦むぎをつくる者もの
を。自おの分ぶんと。其その女に房ぼう子ごの多おほく。と。け。貯たくわ
へる。其その餘あまも。人ひとの製つくへる。衣き服ふくや。又また
人ひとの建たへ。家いえ拵とと。取とり。へ。す。家いえを建た
る。家業かごうの。もの。を。人ひとの。家いえを建たて。やる

代^かり^そみ^そを。其人の作^{つく}り^しと^し籾^{いね}麦^{むぎ}ど^のの。ま
 とを^{つく}製^らつと^し衣服^{いふく}ど^のの^を。貫^ぬふと^しり^しお
 括^くみ^あつと^しを^のど^の是^{これ}が^{すなは}即^{すなは}交^ま易^いの^は始^は
 ま^りり^りぶ^きき^うく^くと^さし^る。今^{いま}を^を交^ま易^いと^さ
 一^い一^いど^し。西^{せい}洋^{やう}人^{にん}の^あ品^{ひん}物^{ぶつ}を^を日^に本^{ぽん}お^の買^か入^い
 て。又^{また}日^に本^{ぽん}の^あ品^{ひん}物^{ぶつ}を^を西^{せい}洋^{やう}人^{にん}お^の賣^かる^う
 斗^たり^りの^あ括^くみ^あ思^しふ^ふけ^けれ^れと^と決^けし^して^てき^きう^うで^でハ
 あ^い。其^{その}括^くみ^あ人^{にん}こ^のが^が自^じ分^{ぶん}の^のあ^らら^らし^し

あゝ其様ふ人々々自分のあゝらゝ

おと。人のこゝらつゝ物とと取りつゝ
ら。交易とらふりのでござる。そこで
又おひくゝ世が開けて。お業もごんく
分れて多くあり。盛るもるも従て。
自分づゝ所々方々馳まらつて。物と
おとと交易する様でハ。それ又時間
が費て。又其お業がはらどらず。減
不便利又あつゝりのごら。そこで其

妻と糸狀の方は持参りて糸狀の

製つくつと衣服きふくと取りつて。其衣服と又
稻いねハの方はたけ持参りもてまゐり。或あるいハ稻いねハの方はたけ
てハ。衣服きふくハ十じふ統と也なり。一ひと最も早はや不用とやるれ
と。傘かさが入用いりよう也なり。一ひと傘かさ四よ五ご本ほん持もて参ま
つてくれろといつバ。又其衣服と
笠かさ平ひらか方はたけ持参りもてまゐりて。笠かさ平ひらの製つく
つと傘と取りつて。其傘と稻いねハ
が方はたけ又またちとちとしふ振ふ也なり。すべて徳とく大たい

卷二

巻五
七

の便利なるもの極まりて。其代はハ
其世話料は。縮ハが方よて縮麦
少く。糸助が方よて衣服一二枚。
笠平が方よて傘一二本を貫て。
其内不用るあがあれば。又入用
るあとり取りつ杯して蓄て居る
り此と見つる。それうら又世が
ごん開て。家業も救るより
れ。

ついで、高人の土事、
遠く、
みえ

と云々くふるはりよは通用金を用

る振よして下さつさりのと云つる。
は通用金とりふ若が出来と在職扱
屋の掬助ハ。自分ぶんで職と反ああと最
初よは通用金と云々るてとけバ。
態、反ああと持出さばとも。は通用
金で酒さけを井ありと二井ありと。勝
子次しよじ来よ買ふ事が出来。又紙屋の
半はん日じつ部ぶも。最さい初しよよ金と通用金とと

し通座金で塩と買ふと味塩と

買と。但しハ来年先來年迄貯て
置と。勝手次第よるつて。酒や肴の
振よ腐るり此でもあし。又稲や麦
の振よ大きふと落よ積むも及
ぞ。とんご初合のよい事よるつと
ので。それくら高賣が中よること
盛よるつて来ま。け振よ通用金
が出來て。それで高賣をとらる振り

るつこいれど。しらが米と取らんこ通
 用金ハ。又的白衣服と取らんこり。
 乃至米月取らんこり。又ハ糸の糸と
 取らんこり。伊道よこ糸の款しと
 取らんこりと取らんこり。おととを
 取らんこり。矢張以糸の物とおととを
 取らんこり。おとと相違しこり。おとと
 唯い物が出来て減よ其取らんこり便利

取らんこり。おとと相違しこり。おとと
 唯い物が出来て減よ其取らんこり便利

買とりふりねハありつゝがごんく
 世の中が閉しるよ後ごくせの姓せいの作り
 出いすあや職しやく人の製せいつ出いすあも多
 くあり又其仕方しほうも巧くわう者しやよありてあひく
 よい物ものが出い来きる振しんよありつゝゆ
 譬たとへバ筑ちく前ぜんの蠟ろう燭そくハ日にっ半はん一いつごよ
 土つち佐さの糺しゆ亭ていハ全ぜん類るいぶのとりふ
 振しんよありつゝ其そのを國くに五ご六ろく拾じゅう里り乃なほ刻こく

百里余の敷とこりつゝもも買かひ又また来きる

振よるつて其を國五六拾里乃る

百里余の處ところりらも。買かうよ來くる根
よるり。それりらあしひらく開ひらて大坂おさか
づの東とう京きやうづの。長なが崎さきづののと。罽きん花か
る出と地ちよ八はつ國こくくら其その國こく產さんと。船ふね
やるりく持もち出だく。ままここ化か玉たまりら特とく
出だの國こく產さんと買かうくる際さいるとりら根
よるりらりらねねづづそそららででごごささるる。そ
ららししてて見み出だせせババ。今いま西せい洋やう人にんがが。彼かの奴やつ

等らが玉たまの産物さんぶつと日本にっぽんも持もて来き
て。又日本にっぽんの國産こくさんと買かひて降くだるのも。
同どうド 厚こう理りでござる。伊い故ことらふり
神かみ様さまの眼めりら御ご覽らんるらさされらば。去こ佐さ
や筑つく前まへりら。东とう京きやうや大だい坂ばんも國産こくさん
と持もて出でるらのも。英い吉きつ利りや和わ蘭らんりら。
日本にっぽんも國産こくさんと持もて来きるらのも。唯ただ遠とほ
いいととちちりり申まをりりで。伊いもも変かつつここららハ

こぎのし。短せう長ちやう皮かわ又また等らが國くにの産うぶ

いと金い来で何も変つてい

ござらん。矢張彼奴等が國の産
紗しゃや吳羅らハ日本よまといくら持く
来て。もう日本ちやの茶ちやや糸いとハ彼奴等
が國の茶ちやや糸いとよりハ。アゴグよりくら
買て参まゐるのでござらん。夫ときく見れば
一村一郷の賣買も。關東くわんとうと西國さいこくと
の賣買も。日本にほん人と西洋人せいやうじんとの賣
買も。少すくも變かつて道理だうりをたのい。こ

茶

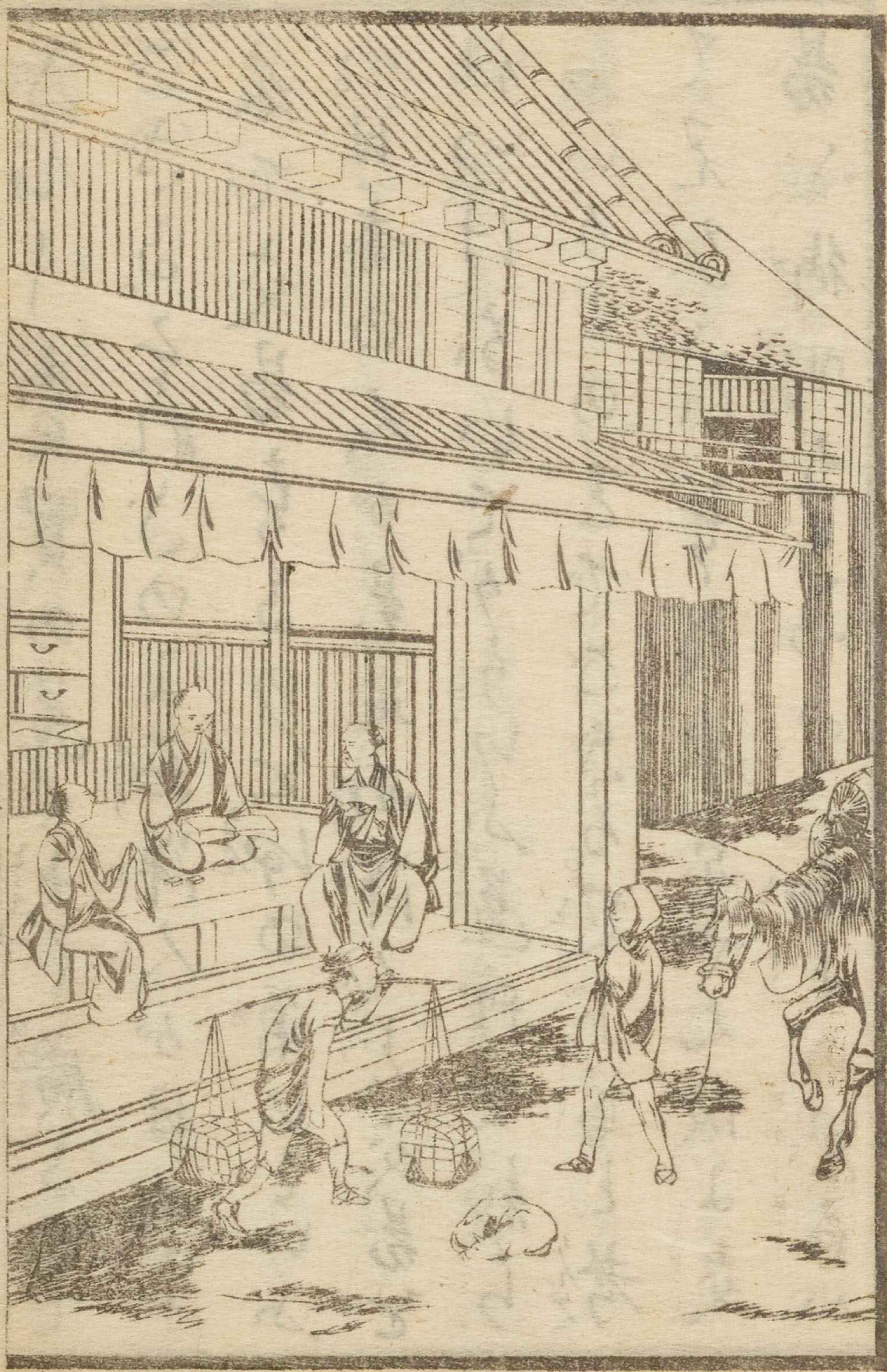
糸

法國より
 東京へ産
 物と運送
 する圖



卷上

十三



卷之七

四



（一）御上

ぶる。貴買の道が^{とく}大く^{ひろ}廣るの^よで
ござる。それ^よの^よある^と洋人^が日本^に
来て^て交易^をする^のこと。伊^の角^のの^とり
ハ。日本^の人^が是^を追^て西洋^と人^と交易^を
仕^つけ^まい^で。う^らり^ふ道^理と^しら
あ^いう^らの^とで^ござる。是^を下^等と^考
て^見ま^さい。し^と及^て東京^や大^坂よ^交
易^と御^上の^思召^ハ。

（一）御上
（二）御上
（三）御上
（四）御上
（五）御上
（六）御上
（七）御上
（八）御上
（九）御上
（十）御上
（十一）御上
（十二）御上
（十三）御上
（十四）御上
（十五）御上
（十六）御上
（十七）御上
（十八）御上
（十九）御上
（二十）御上
（二十一）御上
（二十二）御上
（二十三）御上
（二十四）御上
（二十五）御上
（二十六）御上
（二十七）御上
（二十八）御上
（二十九）御上
（三十）御上
（三十一）御上
（三十二）御上
（三十三）御上
（三十四）御上
（三十五）御上
（三十六）御上
（三十七）御上
（三十八）御上
（三十九）御上
（四十）御上
（四十一）御上
（四十二）御上
（四十三）御上
（四十四）御上
（四十五）御上
（四十六）御上
（四十七）御上
（四十八）御上
（四十九）御上
（五十）御上
（五十一）御上
（五十二）御上
（五十三）御上
（五十四）御上
（五十五）御上
（五十六）御上
（五十七）御上
（五十八）御上
（五十九）御上
（六十）御上
（六十一）御上
（六十二）御上
（六十三）御上
（六十四）御上
（六十五）御上
（六十六）御上
（六十七）御上
（六十八）御上
（六十九）御上
（七十）御上
（七十一）御上
（七十二）御上
（七十三）御上
（七十四）御上
（七十五）御上
（七十六）御上
（七十七）御上
（七十八）御上
（七十九）御上
（八十）御上
（八十一）御上
（八十二）御上
（八十三）御上
（八十四）御上
（八十五）御上
（八十六）御上
（八十七）御上
（八十八）御上
（八十九）御上
（九十）御上
（九十一）御上
（九十二）御上
（九十三）御上
（九十四）御上
（九十五）御上
（九十六）御上
（九十七）御上
（九十八）御上
（九十九）御上
（一百）御上

是と御座るものにて 御上の思召ハ

今御話一と通でござんて賣買の
道と大くして畢竟八日本意体の
身上と。よ〜して下さ〜りとりふ
市趣意ござら。誠と難有〜とあれ。
決して悪く申上るる及理ハありまは
まい。

頑六

成程是下のいひるる所も一應ハ

たる極どが。保足下ハまご。醜夷けいとうんよ
 ぶまされく居ゐるさる。伊い枝せとりふ
 了り。と話わし通醜夷けいとうんが来きてり
 日本にほんの諸色しよしきがあひく。醜夷けいとうんの邦くによ
 出いて行く若わぶりら。け三四年さんしやねん以来いらい
 といふりけハ。諸色しよしきが日ひくの極きよ
 あがつて。先ま刻さもいふ通と何なにでも三
 増倍ぞうばいや四増倍しよぞうばいよるるいあま

ござるし。た上かみたかみ髪かみでで最も早はや三四さんしよ年ねん

増倍や四増倍よるらるいあも

ござらん。け上け候で最早三四年
も續りけるら。それごと日本國中
の若がみんるを念よるらる。外
又仕筋ハるらりと思ふのよ。と
まけよましく、東京や大坂で交易
かどひく盛よるらる。僅
年らき年半の間よハ。日本の金
銀や徳色が。そんる醜夷の子

それハ六君是下りまゝ本年迄の迄

知るさうらんぐら。そんるゆとりひる
さるが。け^{この}三四年^{あうさうしよーま}以来^{この}諸色のさる
つこのハ決^{いっかく}て交易の^{あひむかり}取斗^とでハるい。お
よりらく^{りやく}符^ひのある事^{こと}でとぎいらふむ
も交易とりよりのハ^{ちり}を^{ごうそ}頃始^{はじめ}つて^い俄^いに
盛^{さかん}よるつこので。諸色の^{ちり}を^{ごうそ}け^かが
一旦^{いつたん}よ多く^{おほく}るつこの^{ちり}の^{ごうそ}づ^づら^ら。随^ま分^{ぶん}
それむらりでも^{ちり}諸色^{しよしよ}が^{ごうそ}あ^あら^らこ^こま

ござる。そとでまけり。しが多く

ふれば。うもほどえの仕出も自然
と多く。うも勅定で。それ。げ日
本國中。と出来る。品あが。えて
畢竟。日本國の身上。が。うも
ので。ござる。そと。うも。うも。うも
し。きよ。ざん。く。と。えの。仕出。が。多く
うも。うも。日本。の。流。色。が。殖。て。くれ
バ。と。ひ。く。よ。居。合。が。付。て。くら。う。くら

の巻一
十八

もけ方が澤山よるものうら高直

みても買人がりくからもある。買
人がりくからもあるうら。おあと仕出
す人があえてくるお物と仕出す人
があえてくるうら。おあがごんくと
多くるうら。おあがごんくと多くるう
てくると。成丈手軽よらうら。あ
でも下直よ賣る根よ競てくる。そこ
ごあひくよ居合が有て。遠色がさ

ぐるのハ自然せいぜんの道程みちほどはお遠とほござ
 らんそれごろ今ハまづ交易かうぎの
 始はじつこの身みの所ところでまけりこの方かたが
 滅めつ法ぽう多くて仕出しだの方かたがまづ割わり
 合あいすくまゐり。いちむんむん羅ら儀ぎの
 所ところどろ。是こゝより五年ごねん拾と年ねん後のちのものと
 考かんて見みると。あひくは日本にっぽん國こくの身み
 上かみかよりまら道程みちほどで是こゝ程ほど結構こつこうる

上からゆくまら道程で是程結構な

事ハるまいのでございませう。け二三年と
りふりれの田舎がむひよふと聲一ま
るまらことりふのも。まを交易ぶぐぶん
く諸色のまけ方が多くまらこうら
のゆでございませう。ま一まごえの仕出が。
逆もまけくこの割合よハ多くまらま
な。諸色がりくすらでもまのくられまの
ぶくら。しハ田舎の方がよくて。町

誠まことは難儀なんぎする根ねづか。是こゝがりふ三四
 年としも立て。世よの中なかが穩とこまちなるらふり此
 ろのこのえの仕出しでがぶえくと多くおほくなるら
 ら。諸色しよしきの直ね候ごえがおひくと下さかつて参まゐる
 のハ。眼めよみくこのめでごぎる。保い是こゝらハ
 昔むかしの日本にほん國內うち事ことの賣買うりかひと遠ちかて賣買
 の道みちがおひくよ大おほくなるらる。割わりり
 てみるとをけ方かたのならりがさふしても

て忍ぶとをんは方のなをりりちふりても

始終多りらふりて連も昔の根る下
^ト並る事よハるるまいけれど其代よハ
^む昔るりりて西洋國の品があひくとま
つてくるし。又交易がぶんく感よるれ
^らるるやど。日本惣俸の身上がよくるり
て骨折次まぶとんる儲でも出まる根
よるるりら。怠さるしるければ結句昔
^トの下並であつて時分よりハ余程る

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

うくろるよ相遠さういござらん田舎いんらと東
 京との事と考て見るもさへ。東京といふ
 處ところハ開ひらこところで諸色ガ田舎よく
 らべてて見てハ滅法めつぽう言ういろ。余社暮しやぼ
 よくい道程みちほどごけれど。働はたらさへまこれまを
 東京やど金かねの儲たくわる変かハまいろ。知ち
 意いのある奴やつハみんる東京よ出て身
 上かみと大おほくするでハござらん。それと同どう

上と大くするでハとさうらんを所と所

ト事^ハで決して物の中すい^と変^らがよい
場^と変^らとりよ^りけ^でハる^い都^てあ^のの^さ
い^変不^ど。よく^開の^場変^でと^ざる^ら。
そ^うの^場所^でる^けれ^ば。連^も金^りよ^け
の^出来^るり^れで^ハと^ざら^ん。保^そう^ハい
少^りの^交易^がお^ひ。盛^よる^れば^どよ
し^も自^然と^流色^の。下^直よ^らる^ら
け^れば^らん^道程^がよ^どと^ざる^ら。

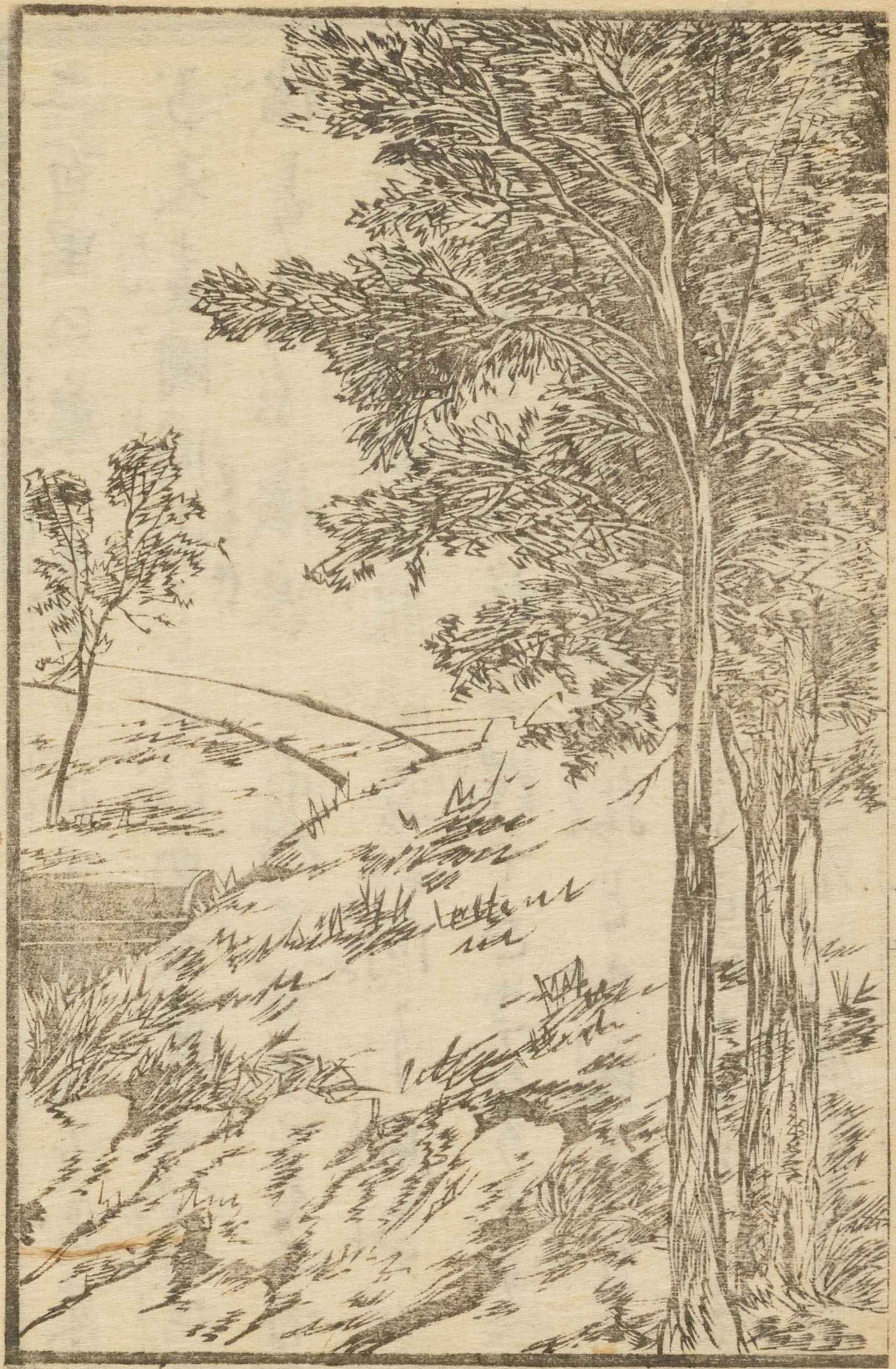
二二二

越ハ何ごとく不又西洋人の方でハ。を來何
 ても機器仕掛でとらるものと發明して。
 譬ハ稲麦と搗くよも。其機器が有
 りればぐらう人よりいらげよ百石や二百石
 の稲麦ハ僅半時りを時との間よ楽よ搗
 く事も出來る。又物と運送とらるも。
 海よハ蒸氣船陸よハ蒸氣車といふ。
 蒸氣の力で走るあがあらつて。る王や

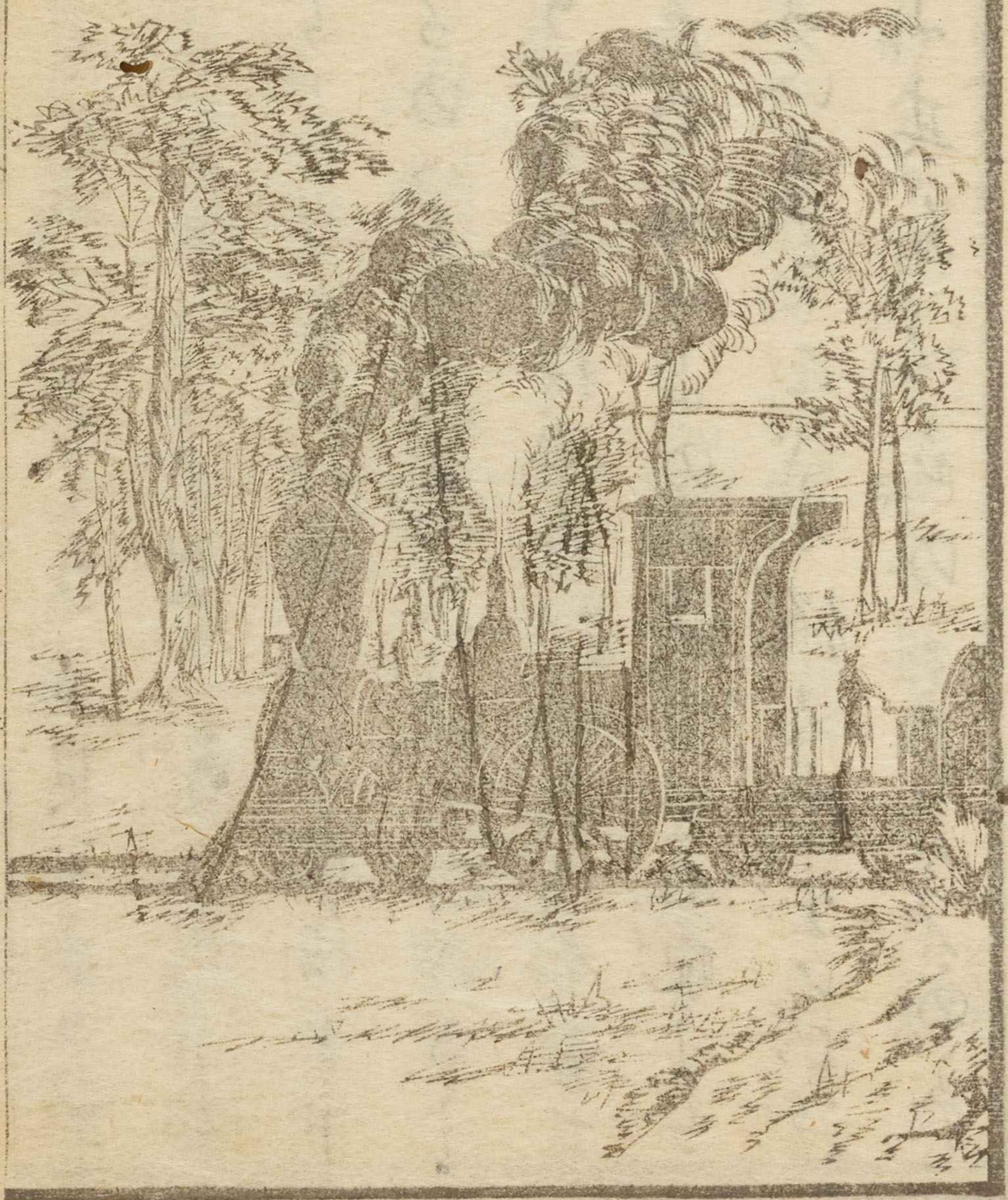
二百里の處
 半日
 一
 屋
 送
 が
 出
 來

蒸氣の力で走るあがあつてるアヤ

二百里の處ところ八半日おちんみちり一日いちひちよ運送うんそうが出来
る。又遠國とんごく同士どうしで手紙てがみの取遣とりやりも八傳信おせんしん
機ばいとろりしばい機器きがあつて。百里ひゃりでも二百
里りでも。煙草えんそう一服いちふく吸まるくい問もんりり用ようみみが
弁べんししるとりしし振ふるる譯わけでござるるううすすべ
て諸色しよしきの壺ねん瓶びんも。自法じはふと下壺かどりりる
そりりでござるる。そりりららふふ已いけけぶぶららけけ後ご
西洋しやう人にんとの交際かうさいが。どんんくく廣ひろくくらられれバ



トヨウキ
蒸氣車
の園



日本のみもあひくそんま道具かつて
来ら振りもあり。又見習て製する振りも
ありあり。そりりあれバ諸色が自然と下
垂よるるのハちりつて話でござる。す
べてうりふ及理のりねごうら。交易で
一旦法色のがるのハ決して配する
よハ及るいふでござる。併又先生の
ときくよ。其外法色のさるるのよも

いらく
の
が
其
中
の
世
の
中
が
悪
か

種々いろくがあるが。其中うちもも世の中よのちが穩とどか
 らあいのので。えの仕しがとしく減ひて。
 諸色しよしきのあがららのと。通用金つうようきんが悪わるく
 つて徳色とくしきのあがららのが。一いち歩ふころころいいとさう
 でござらら。往昔むかし西洋國せいやうこくの。もままごご十じゅうろろり
 開ひらきつつつつの時ときははままの王様おうさまが通用
 金きんととびびくく吹替ふきかてて。ぶぶんんくくよよ其その真價まへ
 とと悪わるくくいいるるががああつつてて。それそれでで該色がいしきがが格かく

...は其の徳色の...

...の...

吹簪のしびごとよ。其金の性がこらく
らつて。今のまどルハ。昔の半ドルもあ
らまい位よらつた。昔まどルで賣つ
物ハ。とでハニドルも三ドルも賣つら
けれハ。昔のまどルの金と取つた刻よ
らまいりせぶら。聞ふ所はまどルのお
がニドルも三ドルもあつた。ねぶけれど。
案ハ何れも諸色の相場があつた。こけ

でハるまい。好くわうて通用金の真ね價うちがととらるる
のでござる但一「ドル」といふ金の真價が今ハとらるる
ことハふまへあらば唯是ハ喻よりふとらるる

夫それ存あり目ひだこの格はと銀色の相場がくるつて

中ちゆうこ交易で銀色のおる格はふらふらで

あい。穢けつ又世の中の難儀がとりかひハ

幸ひと通ととの事がでハるらつてござる。

倭王やまと様の市威いち光くわうぶらら。金かね銀ぎんの性しやうと

悪わるく志し押おりと善よく志し押おりと勝かつて以もて

よるるとハハふりの。あやうりとらつた
み法る政道で。實ハ國の衰徴と招く
招るゆれでござる。おもけ招るゆめハ昔
開けあうつと時分のゆめで。當時ハ甚招
るゆめハるいそらうでござる。すべてまうり
ゆめハけごうら。諸色のおがらのゆめも善
悪があらうて。交易で法色のおがらのハ。
後く玉が開けて。ごんくと身上のゆく

るらるらー又世の中が穩ららららいで諸
色のおがらののと。よき船の性かららららつて
諸色のおがものハ。後々世の中のちくの難儀なんぎ
が増く。と國くにの公びん員びん之ぞうよららるるらー
ぶそららでござい。

頌六

足下とまの講釋かうしやくハ。くこりり。成なる經きやう世
の中が穩とまららららいで。諸色のおがら

のと。と並根の性がつらつとらつて諸を
 のあぐるものハ、ト実より並もろいころい
 るのよ相遠るいが。交易で法の色のあがる
 のハ、ト足下のしひるもの通眼ト前の雨ハ
 ころはくらのても後トのくあよハ、ト打てるい
 のでござらり。併足下ト考て見る
 さし。神武ト以来ト拾二三年あ
 まで。凡武ト五十六百年とらりけ。伊

三十八

其の醜夷のありく取らせばとも困つ
 といふの多きは日本國でござらんら。
 それほどのよとよらつて。伊も急よ後
 のさちいふよ。さつららしく交
 易とせらあるよハ及らいゆでござる。
 尤往昔太閤様時分も。醜夷が来
 て交易しつものもあり。又其後も長
 崎よハ毎年和蘭人や支那人が来

て。交易しければ。是れ日本より多く
つて困るといふ事と持越すといふで
は多い。いまだ解ける事とでござる。成程
是下のりひるさる通醜夷と交易と
をドめれば。徳色のものをけりて多く
るものなり。一旦ハ徳色があがるが。そ
れです。此れと元の仕出が多くなる
つてくる事に従く。ごらん。徳しるが

徳しるが
二二二

澤山さわさんよるつて抄しりこでやうようこひひく
 壺ね辰ちんらささづづるるりり。交易かうぎで徳色とくしきの
 ああががるるののハハ。いいるるゆゆよよおお毒どくももるるりり
 ふふがが。俵わた丸まるでで初はつりり。交かう易ぎとと志しるるけ
 れれババ。徳とく色しきがが始はつ終しゆう下か壺ちんるるりり。居ゐす
 居ゐるるつつてて居ゐるるりり。其その方かたがが猶なほよよいいででハ
 ござござららんんりり。そそれれとともも日にっ本ぽんがが醜しゆう夷ぎ
 のの玉たまりり。徳とく色しきとと買かひ入いれままけけれれババ活くわつ計けい

人む足下おま 偏屈へんくつる先生せんせいの話はなしと聞き馴な馴な
 く居ゐるさうりら。僕わが等らのりふ事ことハ
 中ちゆうも。足下あしもとの身みよハたたいいるままいいけれ
 ど。先まツツききツツ僕わがの愚ぐ論ろんと述のせせり。
 だが儀い何い時じまでまでもべべららと志しやべり
 つつももりりて居ゐてハ看かん官くわん諸しよ君きんが由よし
 急いそ屈くつるささつつく。才さい助すけととりりハ
 名なあありりも似に合あん。氣きのささつつりりままい

交易問答卷之上 終

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]



卷上
三十一

128906

W373

ka86

1

1001796059

Vertical text in a box on the right edge of the page, partially visible.

